

昭和四十年 度

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和四十年一月から十二月までの一年間に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本（初版本のみでなく重版本も含む）並びに雑誌紀要論文を収録した。

一、本要目には、日本思想史及びその関係領域に関する学術的な研究を選択・収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録・Ⅱ雑誌紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育関係・宗教関係・文芸美術芸能関係・政治社会経済関係・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名、著者名、発行所名の順、論文は、題名、執筆者名、掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史研究室所属の助手・大学院学生が協力してあつた。

一、日本思想史という学問の性格上から研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に編集したためもあつて、文献の選択や配列の上において不備の点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

なお、昭和四十一年度版に本年度版の補正を掲載する予定である。

I 単行本目録

総 雑

日本文化史 家永三郎 岩波書店
 日本思想史概論 石田一良編 吉川弘文館
 文学に現はれたる国民思想の研究 一〇五 津田左右吉 岩波書店

庶民の精神史 和歌森太郎 河出書房
 日本の思想 丸山眞男 岩波書店
 日本倫理思想史 上・下 和辻哲郎 〃
 日本道徳思想史 家永三郎 〃

日本における倫理思想の展開 (日本思想史研究会紀要2) 日本思想史 吉川弘文館
 日本倫理思想史研究 一〇三 古川哲史 福村出版
 日本倫理思想の伝統 〃 創文社
 東洋と日本の倫理思想 立正大学哲学 日本評論社

日本における歴史思想の展開 (日本思想史研究会紀要1) 日本思想史 吉川弘文館
 日本の仏教 研究會編 岩波書店
 日本人の宗教心意 安津素彦 桜楓社
 仏教の日本的展開 佐藤得二 桂書房

日本仏教思想史 大野達之助 吉川弘文館
 現代仏教名著全集6 中村元・増谷文雄 隆文館
 日本仏教I 北川(J・M)編 百華苑
 真宗教義と其の歴史 金子大栄 岩波書店
 禅と日本文化 鈴木大拙 角川書店
 禅とは何か 鈴木大拙 筑摩書房

法華経の思想と文化 坂本幸男 平楽寺書店
 日本の風土とキリスト教 岡田純一編 理想社
 日本文学の自然観照 瀨古 確 右文書院
 文学と人間像 東大総合研究会編 東大出版会

児童文学の思想 古田足日 牧書店
 ナシヨナリズム 浦野起央 アサヒ社
 伝承の論理 安永寿延 未来社
 日本のエニトスの構造 前田卓 青山書店
 祖先崇拜の研究 津田左右吉全集21 岩波書店
 思想・文芸・日本語 津田左右吉

日本思想史文献解題 大倉精神文化 角川書店
 日本キリスト教文献目録 国際基督教大学 創文社
 アジア文化研究 委員会編

古代 日本文化史 筑摩書房編 筑摩書房
 平安時代 筑摩書房

日本の歴史		鎌倉幕府	石井進
日本のはじまり・飛鳥と奈良・平安貴族		蒙古采襲	黒田俊雄
日本の歴史		南北朝の動乱	佐藤進一
神話から歴史へ		下剋上の時代	永原慶二
古代国家の成立		戦国大名	杉山博
奈良の都		日本人のための国史叢書	平田俊春
平安京		僧兵と武士	久保田収
王朝の貴族		建武中興	浅野晃
日本人のための国史叢書		戦記物語の女性	西尾実
民族生命の流れ 上・下		中世的なものとその展開	森山重雄
天皇と国のあゆみ		中世と近世の原像	和島芳男
平安時代の文化			亀井勝一郎
上代の日本人			田村芳朗
新稿 日本古代文化			荻須純造
古代仏教史研究			五来重
聖徳太子の浄土観			笠原一男
日本神話の起源			唐沢富太郎
日本誕生の謎			石丸梧平
―科学が解明した神話の世界―			佐々木憲徳
中世			本多顕彰
鎌倉武士・北朝と南朝・群雄の争い			岩本月洲
日本の歴史			秋山範二
武士の登場			道元の研究
井上光貞		読売新聞社	中央公論社
直木孝次郎		中央公論社	中央公論社
青木和夫		中央公論社	中央公論社
北山茂夫		中央公論社	中央公論社
土田直鎮		中央公論社	中央公論社
村尾次郎		中央公論社	中央公論社
肥後和男		中央公論社	中央公論社
藤木邦彦		中央公論社	中央公論社
森田康之助		中央公論社	中央公論社
和辻哲郎		中央公論社	中央公論社
鶴岡静夫		中央公論社	中央公論社
金治勇		中央公論社	中央公論社
大林太良		中央公論社	中央公論社
井上越夫		中央公論社	中央公論社
講談社		中央公論社	中央公論社
角川書店		中央公論社	中央公論社
文雅堂銀行研究社		中央公論社	中央公論社
聖徳太子会		中央公論社	中央公論社
親鸞研究ノート		中央公論社	中央公論社
人間親鸞		中央公論社	中央公論社
教行信証入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄夜話		中央公論社	中央公論社
道元の研究		中央公論社	中央公論社
中世の儒学		中央公論社	中央公論社
中世の生死と宗教観		中央公論社	中央公論社
鎌倉新仏教思想の研究		中央公論社	中央公論社
日本中世禅宗史		中央公論社	中央公論社
高野聖		中央公論社	中央公論社
親鸞研究ノート		中央公論社	中央公論社
人間親鸞		中央公論社	中央公論社
教行信証入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄夜話		中央公論社	中央公論社
道元の研究		中央公論社	中央公論社
中世の儒学		中央公論社	中央公論社
中世の生死と宗教観		中央公論社	中央公論社
鎌倉新仏教思想の研究		中央公論社	中央公論社
日本中世禅宗史		中央公論社	中央公論社
高野聖		中央公論社	中央公論社
親鸞研究ノート		中央公論社	中央公論社
人間親鸞		中央公論社	中央公論社
教行信証入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄入門		中央公論社	中央公論社
歎異抄夜話		中央公論社	中央公論社
道元の研究		中央公論社	中央公論社

正法眼蔵序説	衛藤 即 応	岩波書店	近世日本国民史 33〜50	徳富 猪一郎	近世日本国民史 刊行会
正法眼蔵新講	伊福部 隆彦	黎明書房		平泉 澄校訂	
正法眼蔵物語	永久 岳水	教育新潮社	安土桃山時代の文化	芳賀 幸四郎	至文堂
道元はなにを説いたか	佐藤 達玄	〃	近世日本思想史研究	奈良本辰也 編	河出書房新社
日蓮・その人と思想	里見 岸雄	錦正社			
日蓮とその門弟	高木 豊	弘文堂	近世日本における 儒教運動の系譜	相良 亨	理想社
日蓮思想の根本問題	勝呂 信静	教育新潮社	日本朱子学と朝鮮	阿部 吉雄	東京大学出版会
日蓮の思想と鎌倉仏教	戸頃 重基	富山書房	万葉批評史研究 近世編	平野 仁啓	未来社
蓮如上人御一代記聞書	梅原 真隆	角川書店	江戸時代の国学	大久保 正	至文堂
人間一休 —天衣無縫の悟道とその生涯—	村田 太平	潮文社	本居 宣長	芳賀 登	牧書店
無常	唐木 順三	筑摩書房	教聖 広瀬淡窓と広瀬八賢	広瀬八賢顕彰会編	広瀬八賢顕彰会
中世の文学	〃	〃	思想の歴史6	石田一良 編	平凡社
無常感の文学	小林 智昭	弘文堂	東洋封建社会のモラル	民主教育協会編	福村出版
道元と世阿弥	西尾 実	岩波書店	徳川時代における 人間尊重思想の系譜 I・II —その生涯と思想—	寺島 文夫	文理書院
近世			二宮尊徳 —その生涯と思想—	下程 勇吉	広池学園出版部
日本文化史			二宮尊徳の人間学的研究	池田 諭	弘文堂
桃山時代・江戸時代上・江戸時代下		筑摩書房	吉田 松陰 —明治維新の人間教育—		
日本の歴史					
士農工商・ゆらぐ封建制		読売新聞社			
日本歴史			中村元選集7	中村 元	春秋社
近世2・3・4・5		岩波書店	近世日本の批判的精神	横井金谷	平凡社
日本人のための国史叢書			金谷上人行状記 —ある奇僧の半生—	藤森成吉 訳	
維新前夜 —その一つの流れ—	荒川 久寿男	日本教文社	太閤記の研究	桑田 忠親	徳間書店

太閤軍記
戦国乱世の文学

松好貞夫
杉浦明平
人間往来社
岩波書店

高杉晋作
——維新前夜の群像——

奈良本辰也
中央公論社

大日本史紀伝志表選考

吉田一徳
風間書房

近代

日本の歴史

明治維新・明治の日本・世界と日本

読売新聞社

日本歴史

近代1・2・3・4
現代1・2・3・4

岩波書店

日本文化の百年
——日本文化を創った53人——

共同通信社
文化部編
三一書房

近代日本の精神構造

神島二郎
岩波書店

思想史の道標
——近代日本文化の究明と展望——

生松敬三
勁草書房

日本知識人の思想

松田道雄
筑摩書房

近代日本の思想家たち

林茂
岩波書店

明治人
——その青春群像——

色川大吉
人物往来社

大正文化

南社会心理研究所編
勁草書房

現代日本の思想
——その五つの渦——

久野俊輔
岩波書店

現代日本の精神構造

見田宗介
弘文堂

現代日本思想大系24
哲学思想

下村寅太郎編
古田光
筑摩書房

近代日本の哲学と思想

ピオヴエザナ
宮川透・田崎哲郎訳
紀伊国屋書店

大正哲学史研究

船山信一
法律文化社

西田哲学

高山岩男
角川書店

西田幾多郎
——人と思想——

下村寅太郎
東海大学出版会

西田幾多郎と和辻哲郎

高坂正顕
新潮社

現代日本思想大系23

辻村公一編
筑摩書房

現代日本思想大系27

桑原武夫編
〃

歴史の思想

現代日本思想大系29

益田勝実編
〃

柳田国男

近代化と道徳

小川弘
紀伊国屋書店

現代教育学5 日本近代教育史

岩波書店編
岩波書店

原典近代教育史

松本賢治
福村出版

戦後日本教育論争史(正・続)

船山謙次
東洋館出版

教育思想史

飯島篤信
法政大学出版局

現代教育学4 近代の教育思想

岩波書店編
岩波書店

明治の理想

紀田順一郎
三一書房

現代日本思想大系7 仏教

吉田久一編
筑摩書房

日本の新興宗教

高木宏夫
岩波書店

創価学会

日本キリスト教百年史

新島襄 本多庸一

海老名弾正 植村正久

内村鑑三 新渡戸稲造

波多野精一

熊本バンド研究

同志社の思想家たち

山室軍平回想録

現代日本思想大系13
文学の思想

日本近代文学の思想と状況

明治初期の文学思想 上

日本浪漫派批判序説

文学による太平洋戦争史1
昭和の動乱と文学

三枝康高

日本のナショナリズム

日本のナショナリズム

日本の土着思想
—独創的なリベラルとラディカル—

自由民権思想の研究

日本の社会民主主義

河上肇研究

日本共産党史

石田郁夫

海老沢亮

砂川万里

〃

〃

宮本武之助

同志社大学人文
科学研究所編

和田洋一

山室武甫

中村光夫編

小田切秀雄

柳田泉

橋川文三

三枝康高

上山春平

松永伍一

上山春平

松尾章一

清水慎三

末川博編

田川和夫

三一書房

日本基督教団出版

東海大出版部

〃

〃

日本基督教団出版部

みすず書房

同志社大学生協
出版部

山室軍平出版部

筑摩書房

法政大学出版局

春秋社

未来社

有信堂

至誠堂

大和書房

弘文堂

柏文書房

岩波書店

筑摩書房

現代思潮社

現代日本思想大系3
民主主義

〃

自由主義 18

〃

権力の思想 10

近世無政府主義
二・二六事件
—昭和維新の思想と行動—

大アジア主義と頭山満

美濃部達吉の思想史的研究

日本国憲法とキリスト教

戦後民主主義の展望

日本人の社会心理
—戦後のあゆみ—

日本社会運動史

日本社会運動思想史論

社会主義運動 2・3

弾圧の歴史

覚書 昭和出版弾圧小史

福田英子
—婦人解放運動の先駆者—

現代日本思想大系32
反近代の思想

現代日本思想大系12
ジャナリズムの思想

西郷隆盛

現代日本思想体系21
マルキシズムII

家永三郎編

多田道太郎編

〃

神島二郎編

〃

煙山専太郎編

高橋正衛

葦津珍彦

家永三郎

大串兎代夫

松下圭一

石川弘義

赤松克麿

小山仁示

山辺健太郎解説

塩田庄兵衛

畑中繁雄

村田静子

福田恒存編

鶴見俊輔編

圭室諦成

竹内良知編

筑摩書房

〃

〃

〃

明治文献

中央公論社

日本教文社

岩波書店

憲法の会

日本評論社

三一書房

岩波書店

ミネルヴァ書房

みすず書房

労働旬報社

図書新聞社

岩波書店

岩波書店

〃

岩波書店

筑摩書房

筑摩書房

筑摩書房

筑摩書房

Ⅱ 雑誌紀要論文目録

総 雑

日本人の精神史研究 第四部二—三	亀井勝一郎	文学界一九—二〇—一	伝統は変革してよいのか —戦後の神道論二三に対する意見—	谷省吾	神道宗教 三七
日本文化の構造	岡正雄	国学院大学日本文化研究所紀要六	神道の概念規定とその領域 —本質論を中心として—	岩本徳一	〃
日本の文化的土壌	吉田忠雄	社会思想研究 一七—四	神道の概念 —神道文化の思维方法—	大串兎代夫	〃
日本文化における人間の象徴的性格	高橋順治	拓殖大学 三九	神道とは何か —概念規定をめぐる諸問題(座談会)—	伊藤幹治 他	〃 三八
日本の宗教的寛容の問題	田中元	理想 三八四	神道の核心 —歴史上から見た—	小林健三	〃 三七
真宗概論 二・三	鈴木大拙	親鸞教学六・七	神道とその概念規定	岸本芳雄	〃
浄土教の世界思想的意義	中村元	大谷学報四—一	神道思想の分析について —分析表作製の試み—	小野祖教	〃
仏教に於ける浄土教の位置 —出家道のレールの上に在家道の列車を走らせたのが浄土教である—	船橋一哉	〃 四三—四	動物による咒術信仰 修験道の入峰修行におけるシンボリズム	池田源太	〃 三九
日本歴史の動因としての神道	肥後和男	神道宗教 三七	修験道における修法の論理 —諸尊法を中心として—	宮家準	神道学 四四
神道の内包するもの	梅田義彦	〃	日本人の宗教観とキリスト教の受容と展開	伊藤庄治郎	哲学(三田哲学会) 四六
神霊の系譜	田中初夫	〃	日本文学史観における自然の概念	土肥昭夫	日本仏教 二二
神道とは何ぞ —神事の方面から—	西角井正慶	〃	日本人の法意識	鷹津義彦	世紀 一七八
神道 —その概念規定—	西田長男	〃	祖先崇拜について	阿南成一	理想 三八〇
神道 —その一側面—	安津素彦	〃	日本人と虚無	永田菊四郎	世紀 一七四
神道 —その本質的なもの—	森田康之助	〃	長谷川如是閑氏をかこんで —回想・方法・日本文化論(座談会)—	相良亨	法學紀要日大七 理想 三八二
「神社神道」の宗教学的定義	戸田義男	〃		長谷川如是閑 他	東京大学新聞研究 一三

思想史研究の方法論的検討

衣笠安喜

日本史研究八一

思想史学批判

平田哲男

史潮九二

—だれのためになにをいかに研究すべきか—

文学史と思想史

磯貝英夫

日本文学(日本文学協会)二四—一

共同討議・文学研究における思想と方法

平林一 他六名

〃 一四—三

浄土教と人間関係

—浄土教への人間的アプローチ—3—

西川知雄

三重県立大学研究年報(人文社会科学)五一—一

最近における国学研究の展望

萱沼紀子

国文学 一〇—一三

外国人による日本文化研究の盲点

上田賢治

国学院大学日本文化研究所紀要 一六

—研究会の成果報告—

米人学者の日本史研究(上)

—ホー礼氏とジャンセン氏を問う—(座談会)

児玉幸多 他

日本歴史二一〇

坂本幸男『法華経の思想と文化』

三桐慈海

仏教学セミナー 二

中村元著『比較思想論』

『日本宗教の近代性』『東西文化の交流』

高柳俊一

ソフィア四—二

石田瑞磨『日本仏教における戒律の研究』

田村芳朗

宗教研究 三九—一

瀨古 確著『日本文学の自然観照』

青木生子

国文学 一〇—一二

古田足日著『児童文学の思想』

鈴木敏子

日本文学四—六

「日本人の宗教意識」研究について

—付文献目録—

鈴木範久

宗教研究 三八—三

日本人と日本文化に関する研究文献(3)(4)(5)

—紹介と展望—

戸田義雄

神道宗教 三八・三九・四〇

大学史文献目録(日本の部)

寺崎昌男

教育学研究 三二—二・三

古代

魏志倭人伝にみえるわが民族の思想と生活

岡一男

国文学 一〇—一一

古代日本の思想とその展開

森本治吉

〃 一〇—一

古代的心性

平安永寿延

日本文学 一四—八

神話と歴史

野口恒樹

芸林五—五・六

神話と歴史

直木孝次郎

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

国家形成時代の歴史思想

—記紀編纂の過程を逆に辿って国家形成時代の歴史的伝承に及ぶ—

石田一良

日本における歴史思想の展開

飛鳥奈良時代の歴史思想

—「古事記」「日本書紀」を中心として—

梅沢伊勢三

〃

古代の肖像彫刻にあらわれた歴史意識

小川光陽

〃

平安時代前期の歴史思想

—紀伝道の精神—

柴田実

〃

平安時代後期の歴史思想

—世継ぎ・鏡類と愚管抄—

西尾陽太郎

〃

飛鳥以前の倫理思想	高橋 富雄	日本における倫理思想の展開
飛鳥・奈良時代の倫理思想	坂本 太郎	〃
古代社会における道徳と宗教 —平安初期の「正直心」と神道精神—	梅沢 伊勢三	〃
平安時代の倫理思想 —宮廷貴族生活における「あはれ」の倫理的宗教的性格—	小野村 洋子	〃
律令国家の描いた人間像	伏見 猛弥	論叢玉川大学文学部紀要 五 (第1分冊)
吾国上代における大学の教育理念	村上 唯雄	熊本大学教育学部紀要 一三 (第2分冊)
紫式部の教育観	山岸 徳平	むらさき
古代日本人の死生観	伊藤 幹治	国文学解釈と鑑賞 三〇—一一
日本古代社会における弥勒信仰の展開	速水 侑	南都仏教 一六
奈良の庶民信仰	五来 重	国文学解釈と鑑賞 三〇—一五
奈良時代に於ける弥陀信仰	藤島 達朗	大谷大学研究年報 一六
奈良時代における神仏関係について —天平九年を中心として—	平岡 定海	密教文化 七一・七二
現世主義を支える世界観 —日本靈異記研究を通じて—	中村 恭子	日本仏教 二二
日本現報善惡靈異記と冥報記について	八木 毅	語文(阪大)二五
靈異記と冥報記の蘇生説話	露木 悟義	文学論藻 三一

伝教大師伝に関する一、二の考察	嗣 永芳照	歴史教育三一五
弘法大師の宗教と教化 —三—	別所 千賀照	諸学紀要 一六
天台の密教について	山口 光円	密教文化究・七
弘法大師と天台の巨匠	清水谷 恭順	〃
空海と最澄の交際について	赤松 俊秀	仏教芸術 五七
弘法大師と日本文化	中村 直勝	日本美術工芸 三九
平安朝時代の法華経信仰 —その視点—	名畑 崇	大谷学報四—二
恵心教学私見一、二	白土 わか	印度学仏教学研究 一三—一二
「往生要集」の思想的意義	坂東 性純	仏教学セミナー 一
往生要集に於ける弥陀身土思想について	普賢 晃樹	印度学仏教学研究 一三—一一
蜻蛉日記における仏教的周辺について	品川 和子	学苑 三〇—一
源氏物語の宗教的精神	岡崎 義恵	日本学士院紀要 二三—一三
源氏物語における仏教的要素 —源氏物語はこの世をどう考えているか(覚書)—	丸山 キヨ子	東京女子大学論集 一六—一一
源氏物語終末の救済について	重松 信弘	国文学研究 一
源氏物語の思想 —宇治十帖の主題の意味—	高橋 和夫	群馬大学紀要(人文科学篇) 二四
濡標における栄華と罪の意識 —八十嶋祭と住吉物語の影響を通じて—	三谷 邦明	平安朝文学研究 一一
中古説話集にみえる宿業観	明石 光磨	仏教文学研究 三
中ノ川実範の生涯とその浄土教 —新出資料「念仏式」と「阿彌陀私記」を中心に—	佐藤 哲英	密教文化 七一

今鏡と末法思想

火山列島の思想

—日本的固有神の性格—

古代日本人の自然観

—水神の信仰—

五部神の研究 —序—

神祇伯巨勢奈氏麻呂と神道思想

古代の日蝕信仰と羅睺星

日本文学に於ける自然観の変遷
上代—平安

古代貴族の隠遁精神

—隠者文学成立論序—

和歌の季節感と暦法意識

—万葉集より古今集へ—

北方系文化としての神話

南方系文化としての神話

神話における日本と中国

記紀の創生神話の構成

誓約生みの神話の構成と成立の基盤

火神出生神話の序列

記紀「国生み」神話の考察

神話を文学にまとめた人々

古事記神話と史実

原田隆吉

益田勝実

次田真幸

沼部春友

西山徳

松前健

高木市之助

桜井好朗

関守次男

小島瓊礼

沼沢喜市

松前健

大野晋

次田真幸

守屋俊彦

山川振作

池田源太

浜邦子

文芸研究 五〇

文学 三三—五

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

神道研究 三八

皇学館大学紀要 三

神道宗教 四〇

文学・語学 三六

日本文学(日本文学協会)二四〇

山口大学文学会誌 一六—一

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

〃

文学 三三—八

お茶の水女子大学人文科学紀要 六

国文学攷 三七

東京大学教養部比較文化研究 五

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

成城万葉 二

神々の誕生

神々の名前

火の神の神話の原型とその展開

盤古説話と紀記説話

蛭児神話の一考察

記紀・万葉の伝承と生活

記紀の成立についての学説の批判
—とくに紀前記後説について—

(上・下)

曾富理神古事記の成立をめぐる疑惑

古事記説話成立の一過程

古事記の成立

—(戦後二十年の研究史)—

古事記序文の成立について

記紀の撰修と歴史主義的立場

万葉集における「みやび」について

天平のみやび

—末期万葉の詩語を中心として—

人麿の短歌と思想

憶良私考

—沈痾自哀文を中心として—

村武慶

大林太良

江口彰次

広畑輔雄

中川美里

水野祐

平田俊春

西田長男

山崎正之

太田善麿

西宮一民

森田康之助

吉川貫一

森脇一夫

夜久正雄

竹園八雄

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

〃

中部工業大学紀要 一

漢文学会々報 三

女子大國文 三九

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

神道学 翌・哭

宗教研究 三九—一

文芸と批評 九

国語と国文学 四二—四

国学院雑誌 六六—四

歴史教育 三一—四

神戸大学教育学部研究集録 三三

語文(日大) 二一

諸学紀要 一三

研究紀要(三重大学文学部) 三

相剋と迷妄

—山上憶良をめぐって—

中西 進

文学三三一〇

中古小説に現われた貴族の生活と思想

玉上 琢弥

国文学一〇一一

平安朝歌人の生活と思想

—六歌仙時代を中心に—

佐山 濟

〃

平安時代日記文学に現われた生活と思想

—中世日記も含む—

今井 卓爾

〃

和泉式部日記の心情表現

「はかなし」「あはれ」「つれづれ」の意識について

新妻 順子

日本文学ノート一

紫式部日記における作者の自我

今井 源衛

国語と国文学 一〇一—一四

更級日記の「浪漫的精神」

讃岐典侍日記の死と生

—典侍腹の御子たち—

吉岡 曠

国文学 二〇—四

平安中後期物語の貴族女性の一面

—精神的深化について—

関根 慶子

歴史教育三一五

源氏物語における宇治の大君の造型と作者の精神機構

三村 晃功

文車 一三

源氏物語と往生要集

—源氏物語の精神—

岩瀬 法雲

国語と国文学 四二—二

「もののあはれ」の思想的根拠

久松 潜一

国文学一〇一一

清少納言の美意識と体験

今井 源衛

〃 一〇—九

大鏡の批評性

伴 利昭

語文 二五

「大鏡」の撰関時代史観

今中 寛司

撰関時代史の研究

聖徳太子

—飛鳥時代の仏教美術について—

上原 和

国文学解釈と鑑賞 三〇—五

浄土の美術

—末世思想の信仰と造像—

望月 信成

日本美術工芸 三二三

聖徳太子信仰とその造像

杉山 二郎

仏教史学一二一

民族的心性の源流

—天皇制の論理—

安永 寿延

文学 三三一—

記紀のイデオロギー分析(2)・(3)の上

—アジヤ的思维的諸形態—

守本 順一郎

法政論集(名大) 二九・三一

古事記に於ける神話統合の理念

—別天神系譜より神生み神話への検討—

吉井 巖

国語国文 一五

元明天皇と古事記の誕生

阿部 寛子

成城文芸 四〇

万葉集における天皇観の変遷

—吉野從駕の歌を通しての考察—

広田 二郎

言語と文芸 七一—四

大嘗祭の構造(上・下)

—日本古代王権の研究1・2—

西郷 信綱

文学 三三一—一二

先代旧事本紀の成立

—物部氏研究序説—

本位田 菊士

神道史研究 一三—二・三

(上) (下)

古代日本人の社会観

—神話の国土観念—

上田 正昭

国文学解釈と鑑賞 三〇—一一

上代における数意識

鈴木 奉子

学習院大 国語国文学会誌 八

二葉憲香著『古代仏教思想史研究』

蘭田 香融

仏教史学三一—

古代仏教思想史の分析について

—蘭田氏の批判にこたえる—

二葉 憲香

〃 一二—二

多屋頼俊著『源氏物語の思想』

秋山 虔

国文学解釈と鑑賞 三〇—八

今井卓爾『古代文芸思想史の研究』

小沢 正夫

国語と国文学 四二—一

西田長男著『古代文学の周辺』

神田 秀夫

文学 三三—六

中 世

中世武家の生活と思想

斎藤 清衛

国文学一〇—一

室町文化の一特色とその成立
—基盤—

芳賀 幸四郎

文学・語学三二

鎌倉時代の陰陽道の一考察

木村 進

立正史学 二九

東国における学僧の活動
—金沢文庫を中心に—

小笠原 長和

地方史研究二五—

平家物語にあらわれた儒教

渡辺 貞麿

大谷学報三—四

鎌倉時代の歴史思想
—末法思想の超刻—

原田 隆吉

日本における歴史思想の展開

室町時代の歴史思想

平 重道

〃

中世の絵巻物にあらわれた歴史意識

笠井 昌昭

〃

「愚管抄」と「神皇正統記」以後

塚本 康彦

中央大学国文八

重修神皇正統記考

岩佐 正

国語教育研究二〇

北畠親房の日本書紀研究

久保田 収

皇学館大学紀要三

戦国武士の教養と宗教

河合 正治

広島大学文学部紀要 二四—二

鎌倉時代の倫理思想

数江 教一

日本における倫理思想の展開

室町時代の倫理思想
—軍記物における敵身となさけの倫理—

小松 茂人

〃

夢をめぐる中世人の生活意識

古川 哲史

〃

今昔物語集(本朝篇)にみられる人間像と教育

奥山 悌三郎

研究紀要(三重大学文学部教育研究所) 三〇

世阿弥の教育思想(下)

神保 博行

中央大学教育学論集 七

慈鎮和尚の密教思想について
—吉永蔵「毘逝」を中心として—

三崎 良周

仏教史学三一—

新発見の隆寛著書

櫛田 良洪

日本歴史二〇—

法然における念仏と戒律

奈良 博順

倫理学研究一二

新発見の法然伝記
—知恩講私記—

櫛田 良洪

日本歴史二〇〇

法然上人の阿弥陀止観
—特に実践面を中心として—

高橋 広次

仏教大学教育紀要 四七

法然教学と親鸞教学
—その教義展開をめぐる視点—

藤原 幸章

真宗研究 一〇

大原問答及び聞書抄について

千賀 真順

仏教大学研究紀要 四八

中世における浄土宗の展開
—特に白旗派の確立をめぐる—

鈴木 成元

大正大学研究紀要 五〇

浄土教における「不思議」の考察
—法然・親鸞・一遍—

大野 順一

文芸研究(明大) 一四

原始専修念仏運動における親鸞集團の課題(序説)
—「史料流罪目安」の信憑性について—

古田 武彦

史学雑誌 一八

晩年の親鸞教
—その民族的思考について—

森田 康之助

神道学 四七

親鸞における信の問題
—教行信証の研究試論—2—

熊田健一

秋田大学学芸学部研究紀要(人文科学) 一五

宗祖における願生思想の一考察
—特にその還相廻向論との関連において—

村上速水

真宗学 三二

教行信証と歎異抄

内観の道
—親鸞の宿業観—

武田義範

理想 三八八
親鸞教学 七

教行信証と仏教

宮本正尊

〃

親鸞にみられる自然法爾思想の浄土教思想的意義

石田充之

印度学仏教学研究 一三一—一

親鸞教学の「教」と「学」、特に「教」についての日本学的構想

小野正康

〃

歎異抄の争点

小島 叡成

〃

親鸞に於ける弥陀本仏思想

佐々木 徹真

〃

悪人成仏
—歎異抄第三章について—

伊東 慧明

親鸞教学 六

教団の形成と親鸞の立場

笠原 一男

〃

「歎異抄」に就いて一、二の疑問

小串 侍

同朋学報 一二

浄土の現実的意義
—宗祖の浄土観—

寺倉 襄

〃

真宗興隆の大祖

細川 行信

親鸞教学 六

親鸞の課題とその克服に関する一考察 —2—

出雲路 暢良

金沢大学教育学部紀要(人文・社会科学編) 三

「教行信証」と「浄土文類聚」との関連

稲葉 秀賢

大谷学報 四

信仰と云うこと
—親鸞における信の性格について—

信楽 峻磨

印度学仏教学研究 一三一—二

二種深信考
—親鸞の信における時の構造—

堤 玄立

〃

真宗と土着化

松野 純孝

親鸞教学 六

一遍の宗教について

石田 善人

神戸大学教育学部研究集録 三三

一遍上人に於ける真実と現実との交渉

河野 憲善

時衆研究 一二

時衆二祖の教学 —1—

〃

印度学仏教学研究 一三一—一

中世文化に及ぼせる禪の研究

西尾 実

宗学研究 七

栄西の思想に見る真禪融心への傾向

古田 紹欽

密教文化 充・七

栄西の入宋帰朝と鎌倉文化

葉貫 磨哉

駒沢史学 二・三

栄西の密教について

多賀 宗隼

南都仏教 一六

栄西と道元

関口 真大

印度学仏教学研究 一三一—一

鎌倉時代に於ける曹洞禪の思想的推移について
—清規より見たその対社会面に於ける—

嗣 永芳 照

早稲田大学大学院文学研究科紀要 九

道元禪師における信行の問題

山内 舜雄

印度学仏教学研究 一三一—一

道元における行の意義

新本 豊三

哲学(広島哲学会) 一七

道元禪における行道の基本的性格(承前)
—「行持道環」について—

河村 孝道

宗学研究 七

「普勸坐禅儀」と「正法眼蔵坐禅儀」
—その本証思想に関連して—

黒丸 寛之

印度学仏教学研究 一三一—二

道元禪師における付法相承の
歴史的問題
——特に過去七仏について——

青 竜 宗 二

宗学研究 七

「正法眼蔵」における公案の
扱い方と読解上の問題——

高 橋 賢 陳

印度学仏教学研究
一三——

学 貧 之 説
——「正法眼蔵隨聞記」を読む——

中 山 一 義

哲学(三田哲学会)

正法眼蔵研究序説
——「正法眼蔵生死」卷之研究——

河 村 孝 道

駒沢大学仏教学
部研究紀要二三

道元禪師直後における宗学思
想の展開
——宗学思想史研究序説1——

東 隆 真

宗学研究 七

日蓮初期の戒観について

石 田 瑞 磨

印度学仏教学研究
一三——

日蓮聖人教学と智証教学の思
想的連関

小 松 邦 彰

大崎学報一一九

破門僧・日 親

中 尾 堯

日本歴史二〇七

日陣聖人の教学とその伝統
——本述論を中心として——

水 本 大 岳

大崎学報一一九

室町前期における禪の規範
——特に曹洞下の清規を中心にして——

小 坂 機 融

印度学仏教学研究
一三——

狂雲集の思想闘争的性格

岡 松 和 夫

国語と国文学
四二——八

一休宗純論の方法覚え書

岡 松 和 夫

古典と現代二二

曹洞禪に於ける規範の構造
——室町後半期の変容について——

小 坂 機 融

宗学研究 七

蓮 如
——一五世紀の思想と行動——

山 折 哲 雄

思想の科学四三

蓮如とその周辺

榊 原 洋 子

社会思想研究
一七——七

本願寺の家憲と「家」制度

森 岡 清 美

東洋文化研究所
紀要 三五

説話文学の宗教学的的研究
——説話における教説について——

菊 地 良 一

国文学解釈と鑑
賞 三〇——二

日本中世における道理の観念
——道理法爾と自然法爾——

田 村 芳 朗

印度学仏教学
研究 一三——二

遁世について

大 隅 和 雄

北海道大学文学
部紀要 二

中世の社頭聖について
——近江の神社資料による——

伊 藤 唯 真

仏教大学研究紀
要 四七

勅撰集に於ける神祇歌
——神觀念の考察——

小 笠 原 春 夫

神道宗教 三八

神道集における神仏理念の説
話的展開について

菊 地 良 一

中世文学 一〇

宗祖の神祇観からみる諸天善
神の守護について

本 川 光 定

真宗研究 一〇

神仏習合をめぐる

安 津 素 彦

国学院大学日本
文化研究所紀要 六

諸神根源抄・諸神記・諸社根
元記に就いて(1)
——諸神記と諸社根元記——

島 居 清

ビブリア 三〇

日向薬師の神仏習合 ——

鶴 岡 静 夫

金沢文庫研究
一一——三

中世文学における自然観

金 井 清 光

文学・語学三六

俊成の和歌理念

松 田 順 吉

富山大学教育学
部紀要 一三

俊成の万葉観と古今観

畑 谷 直 樹

国文学言語と文
芸 七——三

俊成の象徴的表現理念 定家の歌論について —有心に関する諸説の展望—	中島洋一	日本文芸学 二
定家歌論書考 —2—	片山亨	国語教育 二
晩年の藤原定家 —その歌風の底にあるもの—	久松潜一	日本学士院紀要 二三—一
定家のデカタンスということ	石原清志	龍谷大学論集 三七八
定家十体の有心様と毎月抄の有心体との関係再考	佐々木忠慧	宮城学院女子大学研究論文集 云
中世斜陽貴族の文学に現われた思想	細谷直樹	国語国文 三三一—一二
面影の理念の展開	石田吉貞	国文学 一〇—一
歌論に於ける面影の本質	中島洋一	日本文芸研究 七—一
歌論における「景気」理念の本質	〃	人文論究(関西学院大) 二六—一
歌論における余情の理念の展開	〃	日本文芸研究 一六—三
今昔物語の武士説話 —平家物語との関連において—	杉本圭三郎	法政大学文学部紀要 九
伝説・説話の世界とその展開 —地獄の思想の演変—	川口久雄	国文学 一〇—一
沙石集の成立過程と説話内容の変遷	渡辺綱也	国文学解釈と鑑賞 三〇—二
平家物語の達成 —序章を中心にその思想についての考察—	星和美	日本文学誌要 一一
平家物語における死の問題 —3—	大野順一	文芸研究(明大) 一二
平家物語における語り主体の位置 —その思想と文体—	杉山康彦	文学 三三—一二
『増鏡』と『承久記』	杉本圭三郎	文学研究(法政大日本文学研究会) 二二
道元の文学	菊地良一	文学・語学 三八
日蓮の文学	小林智昭	〃
吉田兼俱と文学	宮地崇邦	〃
隠者の変貌 —高野の聖の生活と文学との関連をめぐって—	桜井好朗	文学 三三—三
歌に見る西行の現世観と数奇への志向	佐々木克衛	聖橋工業高等専門学校紀要 一
鴨長明の和歌観	谷岡武城	愛媛国文研究 四
方丈記の本質	石津純道	国文学 一〇—九
方丈記の思想	小林智昭	〃
『方丈記』の思想	大隅和雄	中世文学研究の国顧と展望 一
中世的人間像(兼好) —乱世における思想と生活—	西田正好	愛知淑徳短大紀要 四
兼好の自画像 —徒然草断想1—	重友毅	文学研究 二二
徒然草の本質	安良岡康作	国文学 一〇—九
徒然草の思想	藤原正義	〃
『徒然草』小研究 —その無常観を中心に—	堀川祐子	日本文学ノート 一
「つれづれ」の意味	井手恒雄	文芸と思想 二七
徒然草に於ける老荘思想	藤野恒男	漢文学 一一
一言芳談と徒然草	大内摩耶子	歴史研究 九
方丈記と徒然草の比較	新聞進一	国文学 一〇—九

聖の「狂」と隠者精神
—方丈記と徒然草より—

『舞芸六輪』解説

世阿弥の芸術論

世阿弥と日本芸道

心敬の理念「えん」と「からび」

隠者心敬の世界

連歌師の生活と思想

中世芸能人の生活と思想

鎌倉時代武家政治の「道理観」
—上・下—

和島芳雄著『日本宋学史の研究』
古田紹欽著『日本仏教思想史
の諸問題』
—鎌倉・江戸時代—

平田諦善氏著『時宗教学の研究』
を拝読して

戸頃重基著『日蓮の思想と鎌
倉仏教』

五来重著『高野聖』

西尾実著『つれづれ草文学の
世界』

井手恒雄著『中世日本の思想
と文芸』

唐木順三著『無常』

語学文学紀要 三

日本文学誌要 二〇

文学 三三—六

文芸研究（共立
女大） 三

国文学論叢 一二

日本文芸研究
一六—三

国文学 一〇—一

〃

金沢文庫研究
一一—五・六

ヒストリア 三九・四〇

日本仏教 二二

時衆研究 一五

日本歴史 二二—一

日本民俗学会報 四〇

日本文学誌要 二

語文研究 二〇

宗教研究 三—四

近 世

桃山文化論序説

近世後半期の思想

近世武士の生活と思想

江戸文化に影響した外国文化
—翻案と換骨脱胎と—

近世合理主義の一断面
—新井白石と山片蟠桃—

戦国安土桃山時代の歴史思想
—歴史意識の滅亡と甦生—

藤原惺窩小論

仁斎学の形成
—同一の原理—と「弁証法的思维」

仁斎解釈上の一問題点

近世藩学における護園学派の
展開

徂徠の「読荀子」について

江戸時代前期の歴史思想
—とくに山鹿素行と荻生徂徠とに
ついて—

国学における主体的人間論
の創出

宣長と篤胤
—その師承関係をめぐると問題—

私蔵宣長の書簡

上田正昭

梅原正喜

衣笠安喜

松浦玲

井上豊

沢野邦子

宮崎道生

今中寛司

田中佩刀

三宅正彦

吉原文昭

笠井助治

今中寛司

田原嗣郎

真田幸隆

内野吾郎

三木幸信

芸能史研究 八

近世日本思想史
研究

国文学 一〇—一

〃

文経論叢
（弘前大） 一

日本における歴
史思想の展開

解釈 二—二

史林 四八—五

芸林 一六—三

福井大学芸部
紀要（教育科学） 二

文化学年報 一四

日本における歴
史思想の展開

近世日本思想史
研究

国学院雑誌
六六—一二

女子大國文 三六

本居大平小考

六人部是香と国学

解时期社会のルポルタージュ
―本居宣長「秘本玉くしげ」
と武陽隠士「世事見聞録」―

江戸時代後期の歴史思想
―主として国学を中心に―

広瀬淡窓の人間性一、二

近世的合理論の展開
―懷徳堂の思想をめぐって―

国学者色川三中の生活と思想

北越の儒者青木青城の人物事績
―附父弘安、弟海嶠―

服部南郭の韜晦

―護國垂流の性格形成の契機―

洋学史

富永仲基試論

―その思想の基本的性質―

二つの邪馬台国観

―白石説と宣長説―

山鹿素行の思想的立場
―いわゆる古学派の倫理説(1)―

東北諸藩の漢学 ―2―

佐土原藩学思想瞥見

幕末期の学政改革に関する一
考察
―佐賀藩を中心として―

若林敬子

女子大國文三九

岸本芳雄

国学院大学紀要五

杉浦明平

文学 三四

伊東多三郎

日本における歴史思想の展開

大久保勇市

芸文 五―三六―二

師岡佑行

近世日本思想史研究

鈴木暎一

地方研究 五―三

沢口剛雄

斯文 四

梅谷文夫

一橋論叢 二

沼田次郎

日本歴史 二〇〇

内山俊彦

山口大学会誌 一五―二

宮崎道生

日本学士院紀要 二三―二

村上敏治

京都学芸大学紀要 二七

太田孝太郎

岩手史学研究 二

三好利八

国学院雑誌 六五―一二

鈴木博雄

横浜国立大学教育紀要 四

山鹿素行における思想の構成
について
―徳川思想史構成の原理と事実の
再検討をめぐる問題(3)―

田原嗣郎

北海道大学文学部紀要 一四

菅江真澄の教養と学風

井上豊

文経論叢(弘前大) 一

戦国安土桃山時代の倫理思想
―天道思想の展開―

石毛忠

日本における倫理思想の展開

江戸時代の倫理思想
―儒教的人道主義の承譜―

今中寛司

〃

赤穂の忠義塚
―付藤江熊陽墓碑銘―

新田大作訳読

斯文 四二

石門心学の意義と限界
―その通俗道徳への転落の契機について―

逆井孝仁

立教経済学研究 一八―四

石門心学者鎌田鵬について
―寛政期社会思想研究の一掬―

多田顕

文化科学紀要(千葉大) 七

石田梅岩における思想の性格
と構造
―いわゆる「町人思想」の再検討―

河野民雄

北大史学 一〇

町人教訓書にあらわれた奉公
人像
―「主従必得草」について―

入江宏

人文論究(函館人文学会) 二五

葉隠武士道と学館教育、佐賀
藩における伝統と藩校教育の
関係
―九州地方藩校史の研究(4)―

井上義己

九州大学教育学部紀要 一〇

伊吹舎学と草莽門人
―山崎篤利を中心に見たる―

佐藤久夫

法政史学 一七

人間形成に於ける自然の解釈(1)
―三浦梅園の玄語に縁りて―

大谷時中

茨城大学教育学部紀要 一四

水戸弘道館の展開

—その本開館と郷校改革について—

名越時正

芸林 一六—二

江戸時代私学の教育書

山下武

学術研究(早大教育学部) 一三

昌平校に於ける歴史教育の研究

吉田太郎

横浜国立大学教育学部 四

江戸中期以降明治三、四〇年代に至る長崎に見る教育の発展

内山克己

教育科学研究所報告(長崎大学芸学部) 一一

幕末維新の変革期における

—教育者の歩み—
—教育者としての小笠原東陽—

岸本芳雄

論叢玉川大学文学部紀要 五

我が国に於ける社会教育思想の基底形成に関する一考察

—二宮尊徳の農本主義思想をうけて—

松村憲一

フィロソフィア 四八

社会教育家としての大原幽学

久木幸男

仏教大学研究紀要 四八

佐藤一斎先生年譜

田中佩刀

斯文 四二

天保元年前後

—佐藤一斎の研究—

〃

明治大学教養論集 三二

近世思想の仏教受容

柏原祐泉

大谷学報 一三

近世浄土宗教学の特質

服部英淳

印度学仏教学研究 一三—一

日真上人の教学

—本果実証の題目—

林真芳

大崎学報 一一九

仏頂和尚の感化

—芭蕉の禅的背景— 二—

大島寛

国語国文研究 三

徳本行者について

伊藤真徹

仏教大学研究紀要 四七

一瓢日恒上人と一茶、成美

池原鍊昌

女子大國文三七

阿弥陀房抄に就いて

尾上寛仲

印度学仏教学研究 一三—一

平戸の民間信仰 —上—

井之口章次

神道宗教 四〇

「妙好人」の本質的解明

五十嵐明宝

印度学仏教学研究 一三—二

神道に於ける自己超越

—宣長を通して—

岩田正義

神道宗教 三八

平田篤胤のいはゆる俗神道批判

—上・下—

三木正太郎

神道史研究 三—二—三—三

プティジャンと日本再布教

助野健太郎

キリスト教史学 二六

豊前細川藩家老加賀山隼人正興の殉教について

柳田東耕

地方史研究 一五—一

鹿兒島に於ける禁教と開教に関する調査

宮崎円遵 他

竜谷大学仏教文化研究所紀要 四

生活の頹廃と文学

—江戸類聚期文学—

麻生磯次

国文学解釈と鑑賞 三—六

日本文学に於ける自然観の変遷 —近世—

尾形 仿

文学・語学 三六

近世文芸の宗教的史観(一)

—第一編 僧侶と文芸—

村田昇

国文学研究(梅光女学院) 一

武田信玄の学問とその詩文について

河村義昌

国文学論考 一

芭蕉と中世文学の伝統

伊藤博之

中世文学研究の回顧と展望 二九

許六と『莊子』

広田二郎

人文研究(小樽商大) 二九

仏頂和尚の感化

—芭蕉の禅的背景その二—

大島寛

国語国文研究 三〇

芭蕉と禅の接点について

—その基本的な着眼点と、芭蕉の見—

岡部長章

国文学解釈と鑑賞 三〇—一〇

近松門左衛門の苦悶

鶴見誠

実践文学 二六

近松の時代浄瑠璃における義理	佐々木久春	文芸研究 五一	秋成の「時運」認識と自然 ⁽³⁾ —近世における物活観的世界像の形成—	中村博保	国文学研究三一
西鶴の創作時点	野田寿男	文学・語学三二	紫蓮覚 —上田秋成、風流についての試論として—	高田衛	研究紀要(立正学園女短大)九
同時代の西鶴評	檜谷昭彦	国文学一〇—六	平賀元義の和歌に現れた神道観	加藤隆久	甲南大学文学会論集 二八
西鶴の描いた武士	松島栄一	〃	為永春水の文学観とその方法	神保五弥	文学三三一—一
西鶴と自然主義以降の文学	清水茂	〃	渡辺華山の悲劇と文体 —「退役願書稿」「慎機論」等—	杉浦明平	〃 三三一—一〇
人間愛 〆近松が描いた世界〴	野田寿雄	国文学解釈と鑑賞 三〇—三	新論 詩史 —会沢翁の詩作よりみたる新論の形成—上・下—	荒川久寿男	芸林 一五—三〇
義理人情 〆近松が描いた世界〴	高野正己	〃	桃山時代の舞台芸能 —能の流動と固定—	植木行彦	芸能史研究 八
情・人情・義理	白方勝	愛媛国文研究五	文人意識と文人画	北川忠雄	北大近世文学研究会会報 八
古典享受の実態 ⁽⁵⁾ —西鶴の作品のばあい—	梅下敏之	国語教育研究二	歌舞伎作者の生活と思想	柴田浩一	国文学一〇—一
「心中天の網島」に於ける女同志の義理について	白方勝	新居浜工業高専紀要 一	初期華山の芸術と生活 —幕末社会における近代の萌芽—	松崎仁	文化史学 一九
心中物とその思想	大久保忠国	国文学一〇—一	近世前期における「経世済民論」の展開 —山鹿素行の場合—	今中寛司	三田学会雑誌 五八—六
近松における義理と人情	石田一良	文化二九—三	川路聖謨と幕末の政局 —聖謨の政見の形成を中心に—	島崎隆夫	日本大学史学会研究彙報五・六
死 〆近松が描いた世界〴 —心中物を中心として—	荒木繁	国文学解釈と鑑賞 三〇—三	幕末外交に於ける信教自由の問題	笹原一晃	国学院雑誌 六六—六
賀茂真淵の万葉主義 —その思想的考察—	萱沼紀子	国語と国文学 四二—五	儒学思想と幕藩体制	藤井貞文	近世日本思想史研究
談義本研究 ⁽¹⁾ —近世中期に於ける老荘思想流行の実体—	中野三敏	国文学研究三一		衣笠安喜	
ユートピア小説と動物譚 風流山人「風流志道軒伝」と 安藤昌益「法世物語」	杉浦明平	文学三三一—二			
「通」の文学的考察	水野稔	日本文学 一四七			

解时期社会のルポルタージュ

—本居宣長『秘本玉くしげ』と武陽
隠士『世事見聞録』—

熊沢 蕃 山

—元和五年(二六一九)―元禄四年
(二六九二)における「時処位」—

『経緯愚説』成立に関する
一問題—

—真木和泉守の「猷芹」について

細井平州先生の政治思想

—公座・公論・公評について—

異学の禁について(二・完)

—新発田藩に於ける—

石門心学者「鎌倉鵬」につい
て

—寛政期社会思想研究の一側—

市民(自治)意識の形成過程

近世における部落差別思想

社会教育運動の機能と伝統

—富士講を中心とした考察—

近世前期における町人的思惟

江戸時代における商人の格式

—尾張藩御用達商人を事例として—

近世における商人の社会意識

近世町人の生活と思想

金〓近松が描いた世界〓

階級〓近松が描いた世界〓

分限の一考察

杉浦 明 平 文学 三四—一

牛尾 春 夫 広島大学教育学
部紀要第三部 四

小川 常 人 芸林 一六一—

鬼頭 有 一 東洋研究 九

藤井 重 雄 新潟大学教育学
部紀要 六一—

多田 顕 文化科学紀要七

豊田 武 都市問題 五六一五
部落問題研究

衣笠 安 喜 五—二
学術研究(早大
教育学部)一三

大槻 宏 樹 近世日本思想史
研究

森谷 尅 久 地方史研究
一五一四

林 薫 一 日本における倫
理思想の展開

宮本 又 次 国文学一〇—一
国文学解釈と鑑

森 修 賞 三〇—三

向井 芳 樹 //

高浮 康 彦 //

安達 良 平 文化史研究一七

社会階級の行動様式と「こと
わざ」 玉津 徳太郎 日本大学文理學
部研究年報一四

—江戸時代における土農工商を中心に—
徳川中期の経済思想
—国益思想の成立— 藤田 貞一郎 歴史学研究
三〇四

海保青陵・経済策の基礎理念 塚谷 博道 国学院大学
紀要五

宇和島藩における藩政の思想
と行動 藤田 貞一郎 松山商大論集
一六一二

—運上銀体系の成立と「国益」思想—
鴻池善右衛門家の「家定記録
覚」 宮本 又次 大阪大学経済學
一四—三・四

—山片蟠桃『夢の代』—
商人的合理主義の到達点 杉浦 明 平 文学三三一—一

近世自然観の展開 左方 郁子 近世日本思想史研究
大阪学芸大学紀
要(人文科学)三

実学主義の発生について 杉浦 伯 夫 文学三三一—二

徳川武士の美意識の構造 梅原 猛 科学史研究七二
国語と国文学
四二—八

江戸時代における儒者の科学観 中山 茂

寺門 静 軒 前田 愛

—「無用之人」の軌跡—

奈良本辰也編『近世日本思想
史研究』 三宅 正彦 立命館文学
二四〇

—近世思想史の方法と課題—
海老沢有道著『日本の聖書』 ローズ、E・F キリスト教学六

—聖書と訳の歴史—
吉田小五郎著『ザヴィエル』 岩谷 十二郎 史学 三七—四
R・P・ドア『徳川時代の教育』 ブルーエット、J・E ソフィア 二四—三

岡村千曳先生の洋学研究について
—「紅毛文化史話」をめぐって—

沼田次郎

早稲田大学図書
館紀要 六

平野仁啓著『万葉批評史研究
近世篇』

石井庄司

国語と国文学
四二—一一

佐藤昌介著『洋学史研究序説』

伊東多三郎

史学雑誌 七五—二

佐藤昌介著『洋学史研究序説』

芳賀登

歴史学研究 二六

阿部吉雄著『日本朱子学と朝
鮮』

友枝竜太郎

斯文 四三

芳賀登著『幕末国学の展開』

田原嗣郎

史潮 八七

松島栄一著『忠臣蔵その成立
と展開』

進士慶幹

日本歴史二〇三

都立大学伝統文化の会『近世
演劇思想と伝統』

都大論究 五

紀要 女子大学 一二

日欧交渉史研究文献目録
—南欧キリシタン編— F—E—

松田毅一

清泉女子大学
紀要 一二

近代

西洋化とナショナリズム

山本新

季刊社会科学五

日本の近代化とナショナリズム

葦津珍彦

慶応義塾大学大
学院社会学研究
科紀要 四

近代化と伝統
—日本に関連して—

有賀喜左衛門

経済学年報
(慶大) 八

社会変動と近代化
—近代化論の基準点の設定—

十時厳周

比較法学 一一—一

日本「近代化」思想の形成と
その構造

田中明

共同研究「日本の近代化にお
よぼした外国法の影響」
(総論一)

比較法学 一一—一

「日本近代化論」の世界観的
前提

宮川透

東洋文化(東大
東洋文化研究
所) 三九

近代史
—その文学史との相関において—

松島栄一

文学・語学 三二

国民文学論をどう考えるか
—思想的側面から—

深江浩

文学・語学 三二

西洋との接点
—文学者のばあい—

生松敬三

文学協会 一四—四

明治以降における西洋哲学の
受容

山崎正一

理想 三八〇

明治哲学における記号論理學
の理解
—元良勇次郎の場合—

船山信一

立命館文学 三三

西田哲学とホワイトヘッド哲学

野田又夫

哲学研究 四三—九

西田哲学の出発点

武田弘道

人文研究(大阪
市大) 一六—一

幸田露伴と西田幾太郎
—その文学と哲学の底にあるもの—

瀬里広明

文学・語学 三五

大正・昭和の歴史思想

家永三郎

日本における歴
史思想の展開

明治時代の歴史思想

小沢栄一

国語と国文学
四二—一〇

近代の史劇に現れた歴史意識
和辻哲郎と津田左右吉
—大正期における古典研究—

杉山康彦

神道宗教 四〇

皇国史観と津田学説

平田俊春

日本における倫
理思想の展開

明治時代の倫理思想
—「忠君」「愛国」の倫理と近代日本人
の精神構造—

石田一良

明治大学教養論
集 三二

日本における市民倫理の形成
と崩壊
—社会の大衆化と人間疎外—

藤田美実

明治大学教養論
集 三二

明治初期の倫理思想研究の為
の序論(1)―西周の場合―

自然科学受容と封建倫理
―とくに明治維新を中心にして―

和辻哲郎と国民道徳論

和辻博士はマルクスの人間学
をどのように捉えたか
―マルクス人間学に対する和辻人
間学の批判の批判―

幕末維新の変革期における一
教育者の歩み
―教育者としての小笠原東陽―

政教分離に関する政策資料
―特に宗教教育の問題をめぐって―

明治一〇年代の教育政策と伊
藤博文 ――

明治初期における特殊教育の
一研究

明治初期信州教育に見る「強
促」及び「自由」の概念につ
いて
―特に教育令を中心として―

篤農と小学校(2)
―明治初期教育関心の一考察―

明治初期における就学対策と
教育費政策
―長崎県資料を中心として―

森文相の教員養成政策
―所謂「師範タイプ」の形成をめぐ
って―

森有礼の体育論について

小 泉 仰

慶応義塾大学商
学部日吉論文集二

吉 岡 信

倫理学研究一二

山 田 洸

理 想 三八八

豊 田 全

島根農科大学研
究報告 一二(B)

岸 本 芳 雄

論叢玉川大学文
学部紀要五
(第一分冊)

井 門 富二夫

東洋文化研究所
紀 要 三七

千 住 克 己

九州大学教育学
部紀要 一〇

伊 藤 幸 恵

人文学報
(都立大) 四七

有 賀 義 人

信州大学教育学
部紀要 一四

大 槻 哲 夫

地方史研究 一五―三

門 田 美昌明

久留米文学論叢
一三

汲 田 克 夫

愛媛大学紀要
(教育学部) 二〇一

加 賀 秀 雄

日本福祉大学研
究紀要 七

明治二〇年代における学制改
革問題の研究
―初等工業教育の制度化を中心と
して―

明治の女子教育
―小学校を中心として―

明治女学校の研究(1)
―明治女学校の発足とキリスト教―

明治期におけるキリスト教主
義女子体育について

明治後期の思想と教育

明治末期における谷本富の
「新教育」論について
―近代日本教育思想史研究の「覚書」―

嘉 納 治五郎
―近代日本の体育思想(10)―

井 上 毅
―近代日本の体育思想(11)―

三 島 通 良
―近代日本の体育思想(12)―

明治帝国議会における体育建議
―近世日本の体育思想(13)―

明治期キリスト教主義教育体育
―近代日本の体育思想(14)―

高 島 平三郎
―近代日本の体育思想(15)―

工場法と体育
―近代日本の体育思想(16)―

安 部 磯 雄
―近代日本の体育思想(17)―

大日本武徳会
―近代日本の体育思想(18)―

内 田 糺

愛知学院大学論
叢(一般教育研
究) 一〇

尾 形 裕 康

学術研究(早大
教育学部) 一三

青 山 な を

東京女子大学附
属比較文化研究
所紀要 一九

秦 芳 江

同志社女子大学学術
研究年報 一五

本 山 幸 彦

京都大学教育学
部紀要 一一

木 下 繁 弥

人文学報(都立
大) 四七

宮 畑 虎 彦

体育の科学 二五

木 村 吉 次

〃 一五三

〃

〃 一五四

〃

〃 一五五

秦 芳 江

〃 一五六

木 村 吉 次

〃 一五八

〃

〃 一五九

神 田 順 治

〃 一五二〇

木 下 秀 明

〃 一五二二

左右田喜一郎論	馬場啓之助	一橋論叢書一四	昭和・戦前期教育政策史研究 ノート(1) —フアンシズム化過程における教育 —政策決定の性格・昭和初期の思想統制政策を中心として—	埴野謙二	高知大学教育学部研究報告一七
日本理科教育史序 —理数科理科の史的背景とその遺産—	平岩定法	名古屋大学教育学部紀要一二	特集・戦後二〇年の社会教育 太平洋戦争後における歴史教育の変遷(→)(ハ) —義務教育校について—	吉田太郎他	歴史教育 一三—五—一二
東京開成学校と外人科学者 —日本自然科学教育成立史研究(4)—	武村重和	広島大学教育学部紀要第一部(四)			社会教育三—八
教育と社会 —柳田国男における教育—	岩永久次	九州大学教育学部紀要一〇			
語法意識発達史と文法教育の原理 —戦後文法教育の再検討—	徳田政信	国学院雑誌 六六—六	戦後歴史教科書はどう変っているか(2) —学習指導要領の変化—	早稲田大学 教育学部 歴史学研究会	歴史評論一八一
わが国大学生の「生き方」 (価値観)における時代的変容(戦後と現在と)	安藤延男他	教育と医学 一三—九			
軍隊教育変遷の研究	松下芳男	工学院大学研究 論叢三			
賀川豊彦の社会教育思想	花香実	社会教育三—三	明治期における真宗教学史の素描 日本における新宗教発生の精神風土	細川行信	親鸞教学 七
天野藤男 —社会教育の源流をさぐる—	佐藤精作	〃 二〇—七	文芸作品における宗教性 —倉田百三研究—	中濃教篤	理想三八五
山本滝之助の歩んだ道 —社会教育の源流をさぐる—	熊谷辰次郎	〃 二〇—八	明治以降の日本における宗教の学問的研究の推移 —附・宗教哲学、宗教学、宗教思想等文献年表—	朝下桂宇	論集(四国学院大) 九
「昭和」教育史と教労—新教の位置 —教労—新教の教育運動(1)—	黒滝チカラ	教育一五—六		篠田一人	キリスト教社会問題研究 八
加藤完治の農民教育思想 —国民高等学校運動と満洲開拓団—	武田清子	国際基督教大学 学報(教育研究) 一—	北村透谷の仏教	村田昇	密教文化究・七
プロレタリア教育の夜明け 「教育新潮」をめぐって 教労—新教の教育運動(2)—	岡本洋三他	教育一五—七	現代における宗教と政治	小口偉一	東洋文化(東大所)三九
河合栄治郎の教育論	伊原吉之助	社会思想研究 一六—四	近代思想と仏教との対決	遊亀教授他	竜谷大学仏教文化研究所紀要四
教育におけるナショナルなもの —日本フアンシズム教育史序論—	久保義三	研究紀要(武蔵野美術大)二	祭神論に於ける千家尊福の活動 —6・7—	藤井貞文	神道学 四〇・四

神仏分離後の神仏関係について

—都下西多摩郡内の事例二、三について—

加藤 章 一 宗教学年報一五

現代神道についての一私見

キリスト教と日本文化の理解(1)
—境界人 (amarginal man) としての
の「日本人らしいクリスチャン」
の問題—

縄 田 二 郎 神道学 四六

明治前期におけるギリシア正
教受難史

—八王子・葬儀事件をめぐる闘い—

沼 謙 吉

東京経済大学人
文自然科学論集
八・九

日本訳聖書(上・下)

—明治・大正文学夜話(5・6)—

木 村 毅

国文学解釈と鑑
賞三〇—六・七

キリスト教社会倫理について

武 邦 保

社会思想研究
一七—五日本農村における基督教の土
着化(上)

—山梨県目下部教会の場合—

森 岡 清 美

東京教育大学文
学部紀要 五四

明治文学とキリスト教

永 野 藤 夫

日本の風土とキ
リスト教

初期友愛会とキリスト教思想

—2(完)—

斎 藤 秀 夫

歴史評論一八三

基督教信仰と倫理の接点

宇 都 宮 信 哉

商学論究(関西
学院大) 一二—四

C・M・ウィリアムズについて

—長崎時代を主としてみた—

伊 沢 平 八 郎

キリスト教史学
一六

内村鑑三おぼえ書

—2—

岩 谷 元 輝

人文研究(神奈
川大) 三一日本近代文学における批判派
と反逆派

近 松 良 之

京都府立大学
学術報告 一七

土着者文学と出郷者文学と

—近代文学における都市・農村の問
題—

松 原 純 一

相模女子大学
紀要 二一

近代文学と自然観

高 田 瑞 穂

文学・語学三六

明治文学におけるヒューマニ
ズム思潮の系譜

—日本近代文学思潮史研究ノート—

伊 東 一 夫

文学論藻 三〇

近代小説に見る教師像

—明治文壇中心—

平 沢 律 子

日本文学ノート
一

明治の精神と文学(付・付論)

—その反骨・正直・国民的志気につ
いて—

清 水 茂

日本文学
一四—九

明治立身出世主義の系譜

—『西国立志編』から『帰省』まで—

前 田 愛

文学 三三—四

中 村 敬 宇

〃

〃 三三—四

政治小説「佳人之奇遇」の思
出

—明治大正文学夜話—10—

木 村 毅

国文学解釈と鑑
賞 三〇—一二自然主義論における一つの問
題点

—長谷川天溪—

駒 沢 喜 美

法政大学文学部
紀要 一〇

批 評

—透谷の場合—

鍋 島 能 弘

国文学解釈と鑑
賞 三〇—七

鷗外の翻訳文学(5)

—鷗外の女性観とリルケとの交渉を
饒つて—

大 島 田 人

明治大学教養論
集 三二蘆花文学に投影するキリスト
教精神についての疑問点

武 藤 光 磨

熊本大学教育学
部紀要 一三
(第二分冊)

自 責 の 文 学

—透谷・藤村の連関基調—

橋 浦 兵 一

宮城学院女子大
学研究論文集五

近代日本文芸におけるキリスト教の受容 ―藤村文学における虚構と真実をめぐって(2)―	水谷昭夫	日本文芸研究 一六―三
鷗外『護持院原の敵討』の一考察 ―その史料と時代性について―	尾形 仵	国語と国文学 四二―六
初期藤村の位相 ―大西祝との関連をめぐって―	安住誠悦	国語国文研究三
幸田露伴と西田幾多郎 その文学と哲学の底にあるもの―	瀬里広明	文学・語学三五
豹変について ―高山樗牛の場合―	広島一雄	文学論藻 三二
「女学雑誌」の基礎研究―3―	野辺地清江	比較文化 一一
近代文学に描かれた女性像 ―島崎藤村の場合―(その二)	浅井峯治	名古屋女子大学紀要 一一
鷗外とニーチェ	重松泰雄	日本近代文学三
北村透谷の位置と意味 ―文学理念喪失の状況にたいして―	小田切秀雄	国文学一〇―五
成島柳北における反近代	越智治雄	〃
明治二、三〇年代における芸術思想	伊藤敬一	日本文学誌要三
啄木の思想・覚え書	瀬沼茂樹	国文学一一―一
啄木の日記 ―啄木の思想と芸術を探る―	桑島昌一	〃
啄木の評論 ―啄木の思想と芸術を探る―	菱川善夫	〃
啄木における家の問題 ―中山和子「魚住折声」の文学史的位 置―にふれて―	堀江信男	日本文学 (日本文学協会) 一四―二
啄木における小説の占める位置 ―啄木の思想と芸術を探る―	今井泰子	国文学一一―一
啄木の詩歌における思想性 ―明日の世界をめざすもの―	田所睦子	高知女子大國文一
『虞美人草』の思想	伊豆利彦	日本近代文学二
夏目漱石と内田百閒	内田道雄	国語と国文学 四二―七
漱石の思想と文学 ―鷗外と比較しつつ―	吉田精一	国文学 二〇―二〇
漱石の哲学的文学観 ―近代文学の精神に徹した営み―	板垣直子	国文学解釈と鑑賞 三〇―一
漱石の反近代 ―覚え書風に―	三好行雄	国文学 二〇―二〇
漱石における実感と論理 ―二葉亭との関連において―	高田瑞穂	〃
文芸作品における宗教性 ―倉田百三研究―	朝下桂宇	四国学院大学論集 九
或る二重国籍詩人の日本主義 について ―ヨネ・ノグチとアメリカ―	亀井俊介	比較文学研究九
白樺派と対社会意識	渋川 驍	国文学一〇―三
有島武郎のキリスト教入信と その周辺 ―新資料による覚え書き―	上杉省和	国語国文研究三
逆行の論理 ―荷風のアメリカ文学鑑賞―	武田勝彦	日本近代文学二
大杉 栄 ―その文芸活動把握の視点―	佐藤 勝	国文学一〇―三
茂吉の文芸理論 ―写生説の美学的基礎―	北住敏夫	国文学解釈と鑑賞 三―四

堺 枯川 論

寺 谷 隆

国語と国文学
四二一八

大正期文学と自然主義

川 副 国 基

国文学一〇一三

「文芸戦線」初期の性格

小 林 茂 夫

日本文学誌要二

「人民文庫」の意味

辻 橋 三 郎

キリスト教社会
問題研究 九

高村光太郎の思想形成

首 藤 基 澄

国語国文学研究
一

荷風と戯作者

中 村 幸 彦

文学 三三一九

荷風のダンディズム

高 田 瑞 穂

〃

『河童』から『西方の人』へ
―芥川晩年の思想について―

関 口 安 義

日本文学 一四一五

青鞥とヨーロッパのブルース
トッキングについて

田 中 久 子

国語と国文学
四二一七

有島武郎の青年時代
―その日記からの考察―

永 田 哲 夫

高知大学学術研
究報告(人文科
学) 一三

芥川竜之介における宗教―下―

渡 辺 貞 磨

大谷学報四

西鶴と自然主義以降の文学
―抱月・花袋・秋江・白鳥・直哉等
の西鶴観について―

清 水 茂

国文学一〇一六

正宗白鳥論
―自我構造とその機能―

橋 本 稔

日本文学誌要八

百合子の生命感
―大杉栄との比較をとおして―

朝 倉 啓

国文学論考 一

思想の動向
―前衛作品と文芸学―

国 崎 望 久 太 郎

立命館文学 三六

特集・昭和一〇年代の作家と批評家

転向文学の問題

長 谷 川 泉

国文学一〇一七

保田与重郎の文芸批評

神 谷 忠 孝

国語国文研究三

日本におけるサルトルの移入
をめぐる

浦 野 衣 子

比較文学年誌一

民主主義文学運動

飛 鳥 井 雅 通

国文学 二一三

戦時下の文化統制と文学報
国会の動き

尾 崎 秀 樹

〃 一〇一七

大衆作家の歴史観

尾 崎 秀 樹

〃 一〇一二

田中英光論
―戦争期の生活と思想―

島 田 昭 男

日本文学四一四

昭和文学においての戦後文学
―文学の思想的基盤をめぐる―

小 田 切 秀 雄

文学 三三一八

戦時下の「芸術的抵抗派」

荒 正 人

国文学一〇一七

新聞受難史 一・二・三・四

高 木 健 夫

国文学解釈と鑑
賞三〇一二四

日本ナショナリズムの思想的
問題
―「普遍的イデオロギー」との関係―

大 坪 重 明

季刊社会科学五

南北朝問題と藩閥

大 久 保 利 謙

歴史教育三一二

明治初期のキリスト教と外交
問題の一斑
―仙台士族の耶穌教講説に対する
政府の処置について―

松 縄 善 三 郎

国学院雑誌
六六一一

植村正久と日本の国家権力

—キリスト教徒の戦争協力と非協力を理解するために—

和田 洋一

キリスト教社会
問題研究 九

明治初期における愛国心の形成
—12・13—

平田 俊春

歴史教育 一三—二

福沢諭吉にみる国民意識の構造
—明治七年前後—

越智 昇

愛媛大学紀要
(人文科学)二(B)

鶴田皓の「妾」論

手塚 豊

法学研究(慶大)
三八—九

福沢諭吉の天皇感
—明治前期の天皇制思想—

太田 雅夫

社会科学 一—一

日本啓蒙主義の凋落
—福沢諭吉の変貌—

ひろた・まさき

史林 四七—六

嚶鳴社ノート

呉屋 治美

史潮 八九

自由民権家の演説紀行と演説筆記
—明治十四、五年頃の地方集会の景況—

色川 大吉

東京経済大学
人文自然科学論
集 八・九

板垣退助の自由主義運動
—思想と行動—

伊藤 勲

法学新報 七—九

自由民権派にみられる小国主義思想

松永 昌二

史潮 八九

明治二〇年代における伝統主義の性格
—陸羯南について—

岩瀬 昌登

日本歴史 二〇五

明治二〇年代に於ける外交意識について
—陸羯南を中心として—

山岡 桂二

大阪学芸大学
紀要(人文科学) 一三

ナショナリズムとその時代
—四つの型—

江藤 藩吉

歴史教育 一三一—二

アカデミズム憲法学の成立

—日本における近代憲法思想の形成発展の一環として—

家永 三郎

東京教育大学
文学部紀要 五一

明治憲法と天皇機関説問題

宇都宮 静男

歴史教育 三—二

日本における社会主義の受容

古田 光

理想 三八〇

「初期マルクス」研究に寄せて

戸上 実賢

社会思想研究 一七一—一

安部磯雄研究 —1—

坂本 武人

同志社女子大学
学術研究年報 五

大正期「知識階級」論

奥田 修三

立命館大学人文
科学研究所紀要 一五

大正デモクラシーと学生社会運動

中島 万朶

京都工芸繊維大
学繊維学部学術
報告 四—一

「大正デモクラシー」状況下の農民組合運動の構造 —1—

金原 左門

日本歴史 二—〇

民主主義についての一考察
—大山郁夫、樺田民蔵を中心として—

宮本 又久

紀要(岡山大学
教養部) 一

民主主義
—その思想と運動をめぐって—

鈴木 明

歴史教育 三—二

民主主義の人間観
—要約と補説—

塩尻 公明

社会思想研究 一六一—七

河合栄治郎の思想体系

行安 茂

社会思想研究 一六一—四

河合栄治郎の社会主義

佐藤 寛行

〃

日本ファシズムと地方制度
—一九四三年の法改正を中心に—

石井 金一郎

歴史学研究 三〇七

茅原華山の第三帝国論について

山岡桂二

文化史学 一九

二・二六事件と北一輝

石坂富司

日本大学史学会
研究彙報 七

北一輝における国家主義思想の展開
——とくに支那革命外史を中心として——

荒川久寿男

皇学館大学紀要
三

朝鮮問題における内田良平の思想と行動
——大陸浪人における「アジア主義」の典型として——

姜在彦

歴史学研究
三〇七

戦後日本の国家意識

村尾次郎

季刊社会科学五

日本近代化と民衆思想上・下

安丸良夫

日本史研究 九

石坂公歴論
——一般農層思想・意識の総合的研究——

色川大吉

東京経済大学
人文自然科学
論集 七

明治の豪農の精神構造
——細野喜代四郎論——

〃

〃 八・九

名古屋の労働運動と葉山嘉樹

清水茂

社会科学討究
一〇—二

赤羽巖穴の遺稿『乱雲警濤』について

渡辺悦次

労働運動史研究
三八

流行歌のイデオロギー——

長尾直

立命館大学人文
科学研究所紀要
一五

香奠帳からみたる「家」意識
——東京八王子市中山部落の場合——

河上一雄

史潮 九一

竹内好編『アジア主義』

——新植民地主義的進出のモラリッジニ・エネルギ―としての現代的機能——

中瀬寿一

朝鮮学報 三六

色川大吉著『明治精神史』を
読んで

米田佐代子

歴史評論一七三

色川大吉著『明治精神史』

田崎哲郎

史学雑誌 一二

色川大吉著『明治精神史』

安丸良夫

東京経済大学人
文自然科学論集
八・九

色川大吉著『明治精神史』

岩井忠熊

歴史学研究 三二

色川大吉著『明治精神史』の
成果と若干の感想

芳賀登

史潮 九〇

色川大吉著『明治精神史』

山極圭司

日本文学（日本
文学協会）
一四—一〇

色川大吉著『明治精神史』を
読んで

米田佐代子

歴史評論一七三

家永三郎著『美濃部達吉の思
想史的研究』

小林直樹

史学雑誌
七三—一二

家永三郎著『美濃部達吉の思
想史的研究』

松尾尊念

歴史学研究 二九六

中瀬寿一著『近代における天
皇観』・家永三郎著『美濃部
達吉の思想史的研究』

犬丸義一

歴史評論一七三

鈴木宗憲著『日本の近代化と
「恩」の思想』

桜井庄太郎

社会学評論 二四

マルクス主義社会発展論と現
代史分析の方法
——上山春平著『大東亜戦争の意味』
におけるナショナリズム論の
「理想的根拠」を批判する——

福富正実

山口経済学雑誌
一五—五

長幸男著『日本経済思想史
研究』

大石嘉一郎

土地制度史学
七一—一

中根千枝「日本の社会構造の
発見―単一社会の理論―」
―（「中央公論」五月号、一九六四
年）をめぐって（座談会）―

川野重任他

東洋文化（東
大東洋文化研究
所）三九

「大東亜戦争肯定論批判」
―とくに必然論に対する批判―

中塚明

歴史評論一八一

柳田泉著『明治初期の文学思
想』

家永三郎

文学三三一〇

小田切秀雄著『日本近代文学
の思想と状況』

堀切利高

日本文学誌要三

田村栄一郎著『ナシヨナリス
ムと教育』

小松周吉

教育学研究
三二―一

田村栄一郎著『ナシヨナリス
ムと教育』

石戸谷哲夫

教育社会学研究
一九

小林秀雄
―「中野重治・小林秀雄論争」につ
いて―

吉田瀨生

国文学
一〇―七

近代日本文壇史研究資料書目
私稿（関良一編）―続―

下村富士男

〃 一〇―三

一九世紀の日本外字新聞所在
目録

下村富士男

日本歴史二〇〇

昭和一〇年代文学研究文献総
覧

小田切進他編

国文学一〇―七

戦後石川啄木研究文献総覧

岩城之徳

〃 一一―一

その他

日本における近代化の促進と
阻害に関する精神的考察

西村皓

慶応義塾大学大
学院社会学研究
科紀要 四

近代日本における異端思想
―幾冊かの書物を手がかりにして―

小松茂夫

理想 三八〇

生物進化論に対する日本の反応
―明治期のアウトライン―

村上陽一郎

紀要比較文化研
究 五

インドと日本(3)
―ヨネ・ノグチ（野口米次郎）に於
ける精神的緊張の意味―

春日井真也

仏教大学研究紀
要 四八

戦争の動因としての日本の文
化型

井伊玄太郎

教養諸学研究三

科学思想の日本的形態
―序論的考察―

永井博

理想 三八〇

戦後における神話研究の動向

松前健

文学 三三一六

戦後における日本封建制研究
の思想的背景

永原慶二

歴史評論一八四

特集・戦後二〇年歴史学の成
果と課題

永原慶二

歴史評論一八四

明治国家主義思想史研究
序説(1)
―日本近代思想史研究の方法につ
いて―

岩井忠熊

立命館文学 三九

明治国家主義思想史研究
序説(2)
―日本近代思想史研究の方法につ
いて―

〃

〃

三二

日本思想史研究 第一号

昭和四十二年三月二十日 印刷

頒価 三〇〇円

昭和四十二年三月二十五日 発行

送料 四五円

編集代表者 石 田 一 良

仙台市清水小路六

印刷所 丹野印刷株式会社

仙台市片平丁

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室